

刊行にあたって

多くの時間を看護の学びに、あるいは臨床での実践に費やしていらっしやる皆様に、このささやかな本をお届けできるのをうれしく思います。

看護の道を生きては何かを、皆様とご一緒に考える機会をいただいたのは、もう随分前になりますが、そのときの二冊を一つに編集して、今を生きる皆様にあらためてお贈りいたします。

私にとって、看護者との出会いは遥かな過去、五歳のときにさかのぼります。風邪を引いて父に連れられ、生まれて初めて病院を訪れた私を、母のように迎えてくださったのは婦長さんでした。長い白衣と特別のキャップをつけたそのかたは、幼い私の上にかがみこんで、やさしくことばをかけてくださいました。「母親のような婦長さん」の印象はずっと私のこころに残って、将来「あのかたのようになりたい」と思い続けておりました。でも、一〇歳の夏、道に迷っ

て長屋に迷い込んだ私は、貧しい家に蚊帳をつつて寝込んでいる病人を見たのです。「医者になろう。貧しい病人を助けるために」。家に帰ってこの話をしたとき、親も兄弟も喜んで受け入れ、医者になる長い道のりを歩むことになりました。ようやく医者になって二年後、生涯を神さまと人々に捧げるために教育修道会に入り、北九州市の明治学園で多くの教え子が医者之道に進む喜びを味わったのです。

このたび、日本看護協会出版会のご好意により、かつての拙い講演を新たにまとめることができました。皆様が看護の道の尊さを知り、それに徹して生きられるようにここから願って、このつつましい一冊をお贈りいたします。

二〇一五年六月

菊地多嘉子



病む人を自分の仲間である尊い人格として愛し、
献身する姿勢は、現代の看護の世界を照らす光です。

ヴァージニア・ヘンダーソンの論文集のなかに、「看護に優れるとは」と題する論文があります。私はこれを読みながら、次のことばに深くこころを打たれました。

もしも看護が、私の信じているように、本質的には他者の重荷をこたわりなく、十分に、惜しみなく、必要であればその人の死の瞬間まで分かちあうような仕事であるならば、看護婦にそのようなことを可能にさせる忍耐力という才能も考慮に入れて、看護に優れるとはどういうことかを論じるべきです。

ヘンダーソンは、「看護は本質的に、他者の重荷を分かち合う仕事」であるとして、信じておられます。重荷を除去するのではなく、「分かち合う」。しかも、「こたわりなく」、先入観や偏見に左右されず、部分的ではなく、いい加減にするのではなく、「十分に」、余すところなく、徹底的に。そして、一時的ではな

く、「その人の死の瞬間まで」。一回限りの地上における生命を閉じる最も厳粛な、この上もなく尊い瞬間まで、一分一秒をも逃さず病む者に付き添い、見守りながら、その苦しみを分かち合う……。おそろしいまでに尊い仕事。これは、もはや職業ではなく、ナイチンゲールがみじくも言ったように、「天職」以外の何ものでもないのではないのでしょうか。

ヘンダーソンはまた、この信念を展開して、「他者の皮膚の内側に入っていく」看護について語られます。これは、「努力し続けることのできる能力を必要とする極度にむずかしい仕事」であり、さらに、「自分の仲間である人間を愛し、その人のために喜んで奉仕する能力を必要とする」仕事にほかならない、と。病む人を自分の仲間である尊い人格として愛し、その人に仕える、献身する能力を必要とする、という洞察は、現代の看護の世界を照らす光のように思われます。

科学技術の発達に伴い、人間を一個の物体として取り扱う傾向はとどまるどころを知らないまじりになりました。絶望的な重症患者に、耐えがたい苦痛をも

たらず検査を次から次へと命じられるとき、みなさまはおそらく、医師と患者の板ばさみとなって苦しまれることでしょう。病人の側に立って発言しても受け入れられない場合、せめてみなさまの感じるこころの痛みが病人に伝わるなら、その思いやりとやさしさが、苦しむかたがたの支え、力、また慰めともなると信じます。このような時代ですから、看護者と病人の素朴な人間関係、暖かいこころの交流も危機に面しているのかもしれませんが。こうした現状のなかで、人と人との出会いとはなんなのか、看護のなかの出会いとは何か、を再発見することは、「優れた看護」に一步近づくよすがとなるでしょう。

ここで遠藤周作の『冬の優しさ』を引用することをおゆるしくください。

病院というのは、病気を治療するだけの場所ではない。それは医学を通して、人間と人間が交流する場所だと私は思うようになった。

なぜなら、あなたが軽い病気ならとも角、重い病気にかかって、医者に診てもらおうとする。その時、医者はあなたの病気しか関心がないかもしれ